

『すばる』2月号の巻頭で、端倪すべからざる小説と出遭った。北野

波小波大

道夫の「予測A」。北野は二〇〇八年に文学界新人賞、一三年に「関東平野」で芥川賞候補になった。

SFである。すでに人類は限界に達し、進歩も成長もほぼ止まっている。進歩も成長も

ない社会で人々が耽るのは、過去の記録改変。それをビジネスとして請け負うのは、千代田区千代田に本拠をもつ「クロール」とい

北野道夫の新作が面白い

うIT企業。ただし、改変できるのはデジタル情報のみ。生身の記憶や紙媒体は残る。当然、そこにギャップが生じる。しかし、人々

は概してギャップに無関心、無頓着で、今が良ければ何でもいい。

記録改変癖は国民生活に浸潤し、たとえば主人公

□は妻■と一回の性交ごといに五千円を払う。売春ではない。■にとつて□□が初めての男というフェイク事実を確認し合うため

だ。

東の間、□□に懐疑がよぎる。「私は何に納得して現在を平然と過ごしているのだ」。この眩きが、読者に問いを突きつける。あなたの国はいつしか、記録改変の習性に淫してませんか？「クロール」は天皇制の喩、そして、我らの政府の記録隠滅習性への風刺だろう。柄の大きい物語に拍手を送りたい。(桜)